

歩兵第十六聯隊と北支事変 (支那事変)

新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

聯隊は昭和十二年二月十日、臨時編成が下命され、満州国派遣のため諸準備をなし、四月十一日、新潟港を出港した。

十四日北鮮羅津に上陸、朝鮮満州国境を通過し、十六日本部及び主力は一面坡（イーメンパ）に、その他は珠河、延寿、奉沙河、中和鎮に分屯し、治安の維持と精強なる軍隊の訓練に入り満州国国民との間には親善関係を結ぶべく努力していた。

北京を西方及び北方より包囲せんとした敵（山西軍・綏遠軍・中央軍・八路軍等）は、南口の激戦を緒戦として退却に陥り、天鎮、大同の重要地点を奪われ、遠く懷仁方面まで圧迫されるに至り、更に敵は本格的に立ち直る暇もなく山西省内に逃込んだ。山西省は、ことごとく山岳地帯で、これら天嶮の要塞は、人工の工事と共に我が軍の進撃を悩ませた。

昭和十二年八月十八日、応急派兵が下達され、聯隊は関東軍察ハルピン派遣兵团（团长東条英機中将）篠原支隊(仙台)編成下に、八月二十日イーメンパを出発。鉄道輸送及び自動車輸送により山西の戦線へ急行し、九月三日、永嘉堡に下車、臨戦態勢に入った。

九月四日、永嘉堡、九日天鎮を占領、十日陽高城、十五日には大同に入城した。聯隊は集結地点であった岱岳鎮を発し、九月二十六日茹越口、二十九日、鉄角嶺の堅陣を占領した。

この功績に対し、感状を授与されていますので、一部要旨を紹介します。

「感状」 篠原支隊本部 歩兵第十六聯隊 歩兵第三十聯隊（第一、第三大隊欠）

篠原少将の指揮する兵团は、二十七日払暁より、茹越口付近の敵を攻撃し、夜間尚攻撃を続行して主陣地帯を奪取し、翌払暁前、其の背後を急襲せる有力な敵部隊を殲滅し、機を逸せず敵の退却に先んじて険峻なる峡谷を突破し、二十八日更に数次の夜襲を復行し、二十九日朝、遂に鉄角嶺の要衝を奪取し、第五師団正面数万の敵の背後に突進し、この敵を潰走するに至らしめたり。

おもうに兵団の攻撃は堅鉄の如く、迅雷の如く、向かうところ必ず破り、其の追撃は神速にして長軀敵を席捲し、其の成果の絶大なる誠に稀に見るところにして、関東軍作戦の目的を遺憾なく達成し得しめたり、特に篠原少将の指揮下部隊中、冒頭列記の部隊は、本戦闘に於ける武功拔群にして他の範となすに足る。よって茲に感状を授与す

昭和十二年十月二十一日
関東軍司令官 植田謙吉

十月十日の原平鎮の激戦では、第二大隊長以下多数の将兵を失った。この後更に南下し、遂に太原の前哨陣地たる忻州前面高地の堅固極まる防塁に殺到した。この陣地は正面八里に亘り、十月末には総兵力十五万となり、対して我が軍は第五師団と篠原支隊を主とする貧弱な兵力であった。

この山腹のトーチカ陣地より下方に丸見えの我が軍に対し、山砲、迫撃砲を夜となく昼となく撃ちまくる様は、かつての旅順要塞戦で後備歩兵第十六聯隊の我が軍がなめた苦杯を思わせるようであった。

聯隊は西側より、その他の部隊は東北方より力攻に力攻して攻略した。戦いの跡一帯の戦場は屍累々、兵器弾薬無数に散乱し、敵の死傷は三万と推定された。攻撃以来三週間にしてこれを占領し、息つく暇もなく太原目ざし進撃した。

十一月六日、我が軍は続々太原城に迫り、歩兵第四十二聯隊(山口)、歩兵第二十一聯隊(浜田)は北側から、歩兵第十一聯隊(広島)は東側、歩兵第十六聯隊、歩兵第三十聯隊(高田)は西側と完全に包囲し、八日間の苦戦の後完全に占領した。

歴史的太原城陥落が終わり、記念すべき入城式を行った。将兵一同一瞬とても休む暇なく、辛苦の山岳戦、恨みのトーチカ、将兵の髪は伸び顔は真っ黒であったが、勇士の面は感激に輝いていた。

聯隊は、太原攻略後十一月十五日、原所属復帰を下命され、戦没者の慰霊祭を盛大に行い、在満衛戍地に向かい十二月三日帰還した。この三ヶ月間、堅陣猛攻夜襲急追の連続で越佐健児は又も勇名をうたわれた。名誉の戦没者、六百五十余名。

聯隊の北支事変（昭和十二年九月二日、支那事変と改称）参加は、事変初期の北支作戦のみで、北支作戦後は満州派遣陸軍部隊として北辺鎮護の任に当たり、昭和十三年六月九日、牡丹江省ムーリンに移駐、昭和十四年八月、ノモンハン事件に出動した。

（「新発田聯隊史」より）

支那事変で本格的な大陸作戦の戦闘では、同郷部隊である歩兵第百十六聯隊【特設第十三師団（仙台）隷下で、昭和十二年九月十日、新発田で編成】が有名である。

百十六聯隊は、昭和十二年九月二十六日、新発田駅を出発、神戸に終結し、九月二十八日、神戸出港、十月二日上海に上陸。上海会戦・南京攻略戦・徐州会戦・武漢攻略戦等において転戦奮戦し偉功をたてた。

新発田出征以来、終始中支戦線にあり、終戦時、広西省全県に於いて軍旗を奉焼、再び新発田兵営に軍旗が帰ることはなかった。